
ジェームス-JAMES-

穂積礼富

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジェームス - JAMES -

【Nコード】

N2226D

【作者名】

穂積礼富

【あらすじ】

架空世界の王国の、とある歴史書。名君ジェームスの一代記。激動のリッチ王国。

第一章「14世王期」・序

リッチ王国は西南の島国であり、5世王ウィリアムの頃全島統一を果たした。子の8世王アルフレッドの頃に栄華を極めたが、王子たちの争いと、海を隔てた隣国であるゼントル王国の侵攻により王府は瓦解、以後空位時代が続いた。アルフレッドの王弟ヘンリーの孫リチャムが中興し、10世王に即いたあとはよくこれを治めた。

これから記すのは、14世王ワットの治世である。

ワット王と亡き14世王妃ジュエリアには、一粒種の王太子がいた。当記の語る主人公、ジェームス王子である。

ジェームス王子はリッチ暦229年、当時王太子のワットと、王太子妃ジュエリアの間に生誕。国民から大変な祝意を受け、将来を期待した祖父13世王エドワードに、幼少から王侯学の教育を受けた。父が14世王に即位後、間もなく母妃が逝去し、ジェームスにとつては深い哀しみとなったが、その後伯爵令嬢で、王子付きの侍女となった8歳上のモロヘイヤが、母代わりとはいかないまでも、細かい養育に尽力したため、つつがなく成長していった。

そんなジェームスもリッチ暦245年花の月の5日に、めでたく16歳の生誕日を迎えた。

第一部「ジエームス王子の初冠」(1)

その日の朝のリッチ城はひときわそわそわとしていた。
モロヘイヤが

「若様、おめでとうございます」

と目覚ましに部屋に入ると、いつもは朝寝の若も、この日ばかりは寝台の上で絹の寝巻のまま、姿勢を正して座っていた。

「おはよう、モロヘイヤさん」

ジエームスはもとも子どものような風貌であるが、この日はいつにもましてきらきらした笑顔でモロヘイヤを迎えた。

亡き母妃に似たその容貌と澄んだ瞳は、おおらかな彼の心とともに、人の心を掴んで離さない強力な武器であった。

伝統的な侍女の服を身にまとったモロヘイヤは、いつもの通りうやうやしく、

「若様、おはようございます」

と頭を下げて、

「今日は若様の初冠、心より祝福申し上げます」

と、正式に祝意を述べた。

リッチ王国では、王公族は16歳になると冠を与えられ、成年王族

として認められるわけだが、ジェームスの場合それは立王太子の意味も含まれていたので、重大な儀式であった。

「そうそう、それぞれ」

ジェームスはモロヘイヤの祝意に底の抜けた笑顔でこたえた。

「今日はパレードがあるでしょう、そのための衣装が楽しみで」

立王太子を兼ねた初冠という重大な儀式ゆえに、この日は王府下街の大通りにて、大掛かりなパレードが予定されていた。

その際身を飾る衣装を、ジェームスは自ら注文していたのだった。

ふだん幾らかおこづかいを貰ってもほとんど遣う機会を持たなかった若を思い、経験にと侍従たちの相談で献言したためであったが、元来のおしゃれ好きに加えて、このように初めて自分の手で、自分のおこづかいで注文した服が届くと言う喜びが、彼のほおをゆるませてならないのだ。

まして晴れの舞台のパレード、民衆の歓声を想像すると、興奮もひとしおであった。

「若様に着て頂ければ、衣装も本望でしょう。まして、こんなに楽しみにされて、晴れ着としてこれ以上の光栄はないですね」

モロヘイヤは神経質そうに はにかみつつも、慶ばしげに微笑んだ。

この日は朝から色々な儀式や昼餐会などのスケジュールが詰まっていたのだが、いつもは多少窮屈そうな若も、今日はパレード前の衣装合わせを励みにと、着々とこなして行くのだった。

(2)

一方こちらは王府御用達の服飾店。ここでは違った意味での“そわ”が、店内を襲っていた。

「これは一体どういうことだ!？」

老舗の4代目店主、ジョンソンは、目を丸くし怒り心頭、主任のハリスもただただ青くなるばかり。

職人が作り上げた晴れ着は、なんと、きらきらのお姫様ドレス。とても若様が召されるような代物ではなかった。

「我々はただ、デザイン通りに作ったままでして…」

職人の長が上目遣いに呟く。

「私はてつきりりー公女のお召し物かと…」

違う職人が、王弟ローランド大公の姫の名を出して弁解した。

そうなのである。職人には「パレード用の王族の衣装」としか知らされていなかった。

これは開催までなるべく晴れ着の外観を民衆に秘密にしておきたかったジエームスの、特別な希望であったが、このため、届けられたデザインが女物であっても、職人たちは間違いだとは分からなかったのである。

そしてそれは店主と主任の二人にも同じことであった。

ジエームスの依頼に直接対応した二人は、王子の晴れ着だということとは解っていたが、言いつけの通り、届けられたデザインは封を開けずに職人に渡し、出来上がりのこの時まで仕上がりを目にするとはなかったのだ。

「しかし一体これは…、何故姫君用のデザインが…」

ジョンソンは冷や汗をかきながら思い巡らせていたが、思い付くところがあった。

そもそも今回のデザインはわざわざ遠国のエレガン王国の王家お抱えの一流デザイナーに頼んで届けさせたものだったが、どうやらそのエレガン王国のラブイニア王女の為のデザインと誤って入れ替わって届けられたらしい。

それというのもそのドレスの意匠には、オレンジ地に白い鳥が羽を広げたエレガンの紋章がさり気なく組み込まれていて、その華やかさからも察するに、同じく花の月に結婚予定の王女の花嫁衣装だと考えるのが自然だったからだ。

ラブイニア王女のおしゃれは有名で、貴族や民衆のファッションリーダー的な存在であり、結婚式ということでかなり力を入れたのだろう、デザインは大変凝った作りになっていた。

ジョンソンは頭が真っ白になった。もうすぐパレード。時間はもうない。

何とか短時間で男物に作りかえようかとも思ったが、異国の紋章をあしらった作りまでは改められそうもないし、そこを無視すれば不謹慎な違和感が残る。これは諦めるしかない。何か代わりの服を。

そのときハリスが思い付いたように叫んだ。

「在庫の子供服でごまかしましょう！幸い作り置きが…」

「馬鹿者！」

ジョンソンは頭を抱えてたしなめた。

「相応の報酬で引き受けた、まして名誉のある仕事だ！だいたいパレードの晴れ着がそんなものでごまかせるか！もうこうなったら責任をとって店をたたむしか…」

怒鳴りながらも内心落ち込んでいると、店の前に馬車が停まった。王府の紋章の入った…。

「侍従の者であるが、若様は大変心待ちにしておられ、特に命を受けてお迎えに参った。」

復古的な、張った声が聞こえた。もう後戻りは出来なかった。

(3)

その頃リッチ城では王公族そろつての昼餐会が開かれていた。

侍従に服屋の迎えを頼み、今からつきうきのジェームスは、食事もそぞろに済ませて、嗜好茶を飲み飲み、いとこのロイ公太子らと会話を楽しみ、気を紛らわしていた。

王子の目の前に座ったワット国王は、彼に向かってしみじみと、

「ジェームス、今日は本当におめでとう。わたしはお前が何より健康に育ってくれたことがうれしい」

あとはくどくど言わず、黙って嗜好茶をすすった。

元来王としては精神が細く、彼の治世から大臣に政や軍事を任せることが多くなり、文弱と言われた国王であつた。

ゆえに母妃に似て快活に育つたジェームスは、やはり心強い存在だつた。

「ありがとう！」

ジェームスは期待を重々承知していた。だからこそこの日のパレードは門出としての特別な儀式だつた。

リッチ城に向かう馬車の中、青ざめたジョンソンに、ハリスはひそひそ語つた。

「遠い異国の伝説ですが、“裸の天使”という言い伝えを思い出し

ました。天使がよこしまな黒い鳥の服屋に羽衣を作るよう頼むのですが、面倒臭がった鳥は“この羽衣は愚かものには見えません。馬鹿な私には不要のものですから、差し上げます”と、何か渡すような物真似をして、ごまかすという話です。以来天使は裸で…」

「それがどうした」

ジョンソンは心ここにあらず、ぶっきらぼうに遮った。

ハリスは神妙な顔で、侍従に聞こえぬよう尚さら声をひそめて、さやいた。

「我々も、ここはよこしまな黒い鳥になるしかありませんな」

王子の部屋に通されたジョンソンとハリス。二度目ではあるが、このときは緊張の種類も違った。
何しろ王子に嘘をつかなければならないのだ。

冷や汗をかきながら待っていると、昼餐会を終えたジェームスが喜び勇んでやって来た。侍従が、

「若様のお出ましー」

と声をあげると、二人は姿勢を正し、深々と頭を下げた。

「この度は…うにやむにや」

「出来た？」

ジョンソンの聞き取れない挨拶を、ジェームスの核心を突いた一言

が遮った。

「見せて！」

ニコニコ顔のまま、ジェームスはおねだりをするように重ねた。

あわあわと焦り出すジョンソン。

ここでハリスが割って入った。割り切ったのか、割合堂々としている。

「今回作り上げましたのは、遠い異国から取り寄せました伝説の生地を使った、民衆のことを思いやる優れた王子にしか見えない晴れ着でして…」

「それじゃみんなには見えないじゃん。」

知恵を絞った一言は、ジェームスに簡単に一蹴された。

「あ、違います、あの…他の民衆には見えるんですが…王子には見えないっていうか…あ、そうそう、違います違います、愚かものには見えない服なんです」

しどろもどろになりながらも、アレンジする前の原本を思い出してハリスは言った。

「僕にも見えないけどなあ」

ジェームスは素直に言った。
大変不愉快そうである。

「シェーファー卿には見える？」

侍従のシェーファーは、王立学院出のエリートである。彼は答えた。

「残念ながら私には学が足りぬようで、見えないようです。しかし、もつと愚かな者が二人、この部屋にはいるようです。」

…この一言でジョンソンとハリスは観念し、深々と頭を下げ謝罪したあと、事情を洗いざらい話した。

「…というわけで、晴れ着をご用意することが出来ず…代金はもちろんお返しします」

しかし、ジェームスはお金が戻ってきてもしようがない。もうパレードに備えて民衆が大通りに集まり始めている。

そんな折角の威信を示すチャンスが、ふいになってしまったのだ。ふつつつと怒りが込み上げて来て、とても許せない。彼らばかりが悪いわけではないが、詐欺の罪人として牢に送り込むには充分であった。

しかしいろいろ考えたあと、ジェームスは哀れむような目で二人を見て、言った。

「足下たちは本当によしまだけれども、今日はめでたい日だから、赦すことにします。お金もいりません。そのかわり…」

(4)

日差しも和らいだ昼下がり、幸いにも晴天のもと、ジェームス王子の初冠と立王太子を祝してのパレードが始まった。初冠と立王太子の儀式を行う予定の聖堂まで、国王や、ジェームスはじめ王族らの馬車が列を作り向かうのである。

まず侍従を乗せた馬車が先陣を切って現れると、集まった民衆からは大きな歓声が上がった。

侍女のモロヘイヤは、父親のモロ伯爵や、他の有爵貴族たちとともに、最前列でパレードの様子を見ていた。

「今日の若様の衣装は楽しみだね」

「なんでも噂では、情報が漏れないように職人にも隠して作らせたらしいし、相当凝ったものだろう」

と言ったような声が、後ろの民衆から聞こえ、モロヘイヤもまた非常にわくわくしてきた。

あれだけ楽しみにされていたのだから…。

モロヘイヤは思い出して意図せずほおをゆるめた。

侍従の馬車のあとを、国王の馬車、続いて他の王公族の馬車が行くと、歓声と拍手はますます大きくなった。

そして最後にいよいよジェームス王子が…。

歓声はどよめきに変わった。

5頭の馬が引く舞台の上に、間違いなくジェームスは立っていた。

そして手を振っている。

しかし服装は…確かに礼装で、勲章もつけていたが、ふだんのもので変わらない。

民衆はみな不思議がった。

するとその後ろからもう一台、馬に引かれた舞台がやって来た。立っているのはジョンソンとハリス。

やがてその舞台は停まり、ジョンソンが持っていた大きな箱から様々な在庫品の子供服を取り出して見せると、ハリスが叫ぶ。

「若様はご自身の晴れ着代を遣って子供たちへのプレゼントをお買いになりました。皆さん順番に取りに来て下さい！」

民衆の中の、生活に余裕がなく、子供に新しい服を買ってやれないような人々は感激し、子供もまた大変喜んだ。

富裕層もまた、王子の計らいに感銘し、中にはお祝いとして子供たちへ足りない分の服を注文してあげる人も出てきた。

伝説の中の天使は最後に無垢な子供に裸を笑われ、失意のうちに天へ帰っていったが、王子はかえって子供に服を与えたのである。

「そういうことだったのですね！」

モロヘイヤも、そう合点し、大変心打たれた。

「若様はきつと大変な名君となられます！」

こののちの諸儀式での民衆の祝福ぶりは大変なものだった。こうしてジェームスは晴れて王太子となり、見事な門出を飾ったのである。これがジェームス名君伝説の華々しい幕開けであった。

∴ エレガン王国の婦人たちの間に男装が流行り出すのはこののちのことである。

【第一部・完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2226d/>

ジェームス-JAMES-

2010年10月21日21時34分発行